

授業評価・授業研究報告

保健体育講座・山本万喜雄

はじめに

本教科は、中学校及び高等学校教諭職員免許状（保健体育）を志望する学生の必修科目である。この教育法は、体育分野と保健分野に分かれており、担当者は複数いる。又受講生は 31 名（3 回生）で、教育実習を終えたものとこれから参加するものとが混在している。教育実習で保健の授業をした学生の経験は、やはりリアルで学ぶべきことが多い。

本報告では、保健科教育を中心に展開している教育法 2 の発展として、学生がどう成長したか、レポートの内容を中心にして報告したい。

1 保健分野の学習を終えて

① 実習とその振り返り

自らの実践の振り返りは、授業実践、研究協議、内省、そして今回の授業紹介ということで、実践を振り返ると同時に授業をイメージしてもう一度授業を頭の中で、リアルな子どもをイメージして行うことができた。みんなに紹介するということが、教材研究の着眼点や伝えるべきことに留意しながら報告した。自分の実践で唯一自慢できることは生徒の名前を呼んで発問すること、そこから授業の雰囲気をつくっていくということである。

② 教材研究の着眼点の見直し

教材研究の着眼点については、山本の講義から教材のとらえ方、その活用について

学んだ。いままで学んだことをさらに掘り下げた講義で、新しい発見も多くあった。特に詩を用いた実践や新聞を教材とする実践は、以前にも学んだことがあるにもかかわらず、新しい発見が多くあった。教材研究が教科書について調べるだけでなく、広い視野を持ち、アンテナを張る必要に気づいた。また、生活に役立つ内容を取り入れていくことも意識したい。

③ 教材解釈力を高める

保健の授業は、私たちが健康で幸せな生活を送るために必要な知識や技能を得ることが、やはり根底にあるのではないかと再認識した。次年度に控えている高等学校の実習のためにも自らの教材解釈力を高めなければならない。児童・生徒に「何を伝えたいのか」、「この子たちには何が足りないのか」、「どこを伸ばしてあげればいいのか」、ということに留意し、教材を選択し、内容へのアプローチをする必要がある。

附属中学校での実践の失敗の一つでも克服し、学ばせたい、身につけてもらいたいことを伝えられるような授業を展開していけるようになりたい。（アカネ）

この学生が 2 回生の時、次のようなコメントを書いていた。

「今回の授業での学びは、実践に生かすことだと思っています。しかし、私たちの身近な授業で私たちが生かしていないことは、将来にもマイナスなことだと思います。」

これを踏まえて、私自身もそうだし、私の周りもプラスになるような学習環境を自らつくっていくくらいの気持ちで、今後の学生生活を送りたいと思います。」

このように実習前にも積極的な生き方をしていた学生ではあったが、実習を通してその学びがより具体的になり、教師への志がさらに大きく着実になったといえよう。次に、これから実習を経験する学生のレポートを紹介しよう。

2 実習への期待と不安

教育法Ⅳの授業を受けたことによって、自分が教育実習に行き何ができるかを考えさせられた時間になった。仲間が教育実習に行きどんな気持ちになったか、何に苦戦したか、話を聞けば聞くほど不安が募ってきた。いままで教えるという観点で授業を受けたことがなかった。

実習に行ったメンバーは、導入が大事と皆口をそろえて言っていた。道筋をしっかり立てることが近道だと思う。そのためには、しっかり内容を理解しておかなければいけないし、話術の力量も鍛えておかなければならない。話し方講座などで人との距離やうまい伝え方など教えてくれる機会がある。実習に直接的には関係ない内容であっても、たくさん応用できる。

いつも山本は、毎回しっかりとした内容のある授業を展開してくれる。組み立て方が上手だ。子どもの気持ちが分かっているというか、体の使い方や話し方の緩急などに工夫がされている。何を基準に授業を組み立てるのか、山本自身にもっと話を聞いてみたかった。この単元を持つとしたらどうするか、盗みたいとも思った。なかなか

保健について学ぶ機会がない。この貴重な体験を生かしていきたい。つまりいたとき、ぜひ相談に乗ってください。(英里香)

今回の教育法は、実習生の体験談を踏まえての授業になっており、すごく現実味があった。今まで教育現場は近いようで遠い存在であったが、話を聞いているだけで少し身近に感じ、もうすぐ私もその現場に足を踏み入れることができるのだと実感した。自分が授業をするときはどうするだろう、どうやって伝えるのだろうと考えながら授業を受けることができ、いままで以上に将来に役立つ授業になったように思う。

この授業では、保健の授業の進め方だけでなく、小学生・中学生のからだと心の成長についても学ぶことができ、改めてその大切さに気づいた。私は来年に教育実習に行くが、学んだことを活かせるよう、記憶と記録に残しておきたい。(めぐみ)

おわりに

この授業では、教育実習の経験を生かすとともに、「未来の教師」への夢、そして教師としての力量を高めるために模索を続けてきた。そこで問われたのは教師自身の研究心、実践力、同僚性であった。幸いこのところ、中学生に直接働きかける機会が多く与えられ、感想文によってその手ごたえをつかむことができた。しかも300枚のラブレター(感想の返事)を書くことによって、思春期を生きる子どもたちと深く結ばれることができた。さらに修行を重ね、教育法の理論と実践に磨きをかけたいものである。体育科教育法や附中の同僚との協働に感謝したい。